

退職に当たって

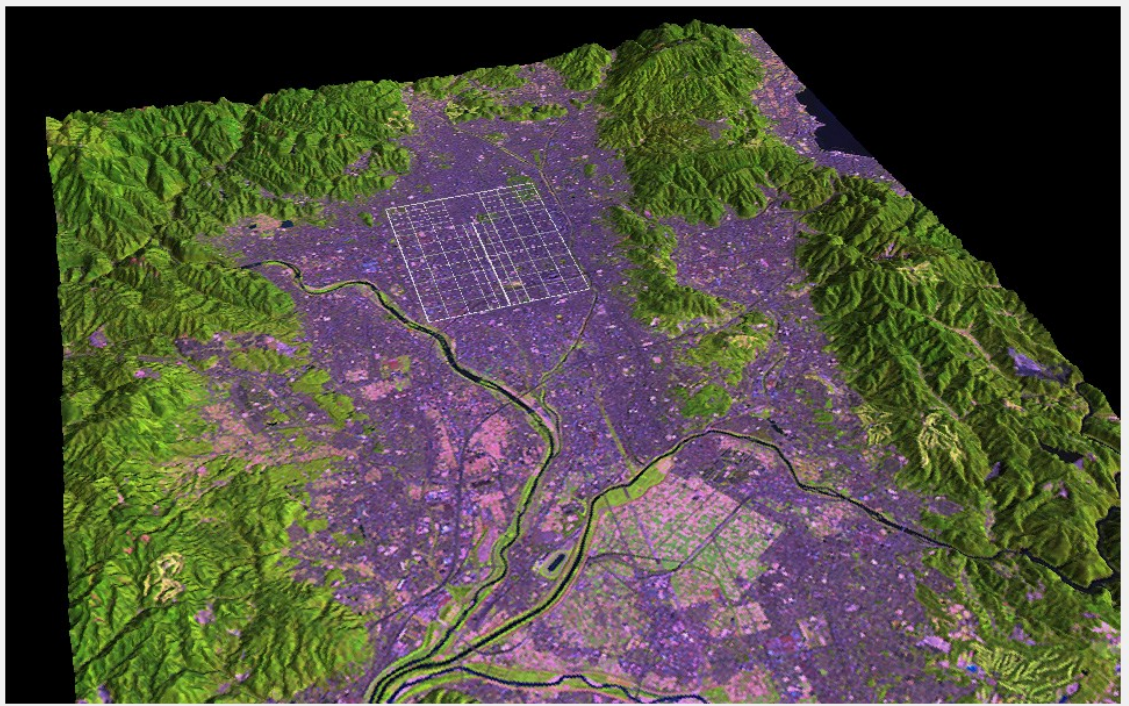
小方 登

「指先に情報を」というビジョンを語ったのはマイクロソフトの創業者ビル・ゲイツで、1990年頃のことだったという。パソコンが普及し始めた頃で、まだ図体は大きく、グラフィックは色や画素数が限定されていたし、ネットにつながるというアイデアも乏しかった。同じ頃、英国のGISを専門とする先生が、「将来、手のひらに収まるような機器を操作すれば、どこに美味しいレストランがあるか地図上で見ることができるようになるよ」と言っておられた。あれから30年あまり、その夢がこれほど完璧に実現するとは感慨を禁じ得ない。スマホの普及がゲイツのライバルであるスティーブ・ジョブズ率いるアップルによるものだったのは皮肉だが。

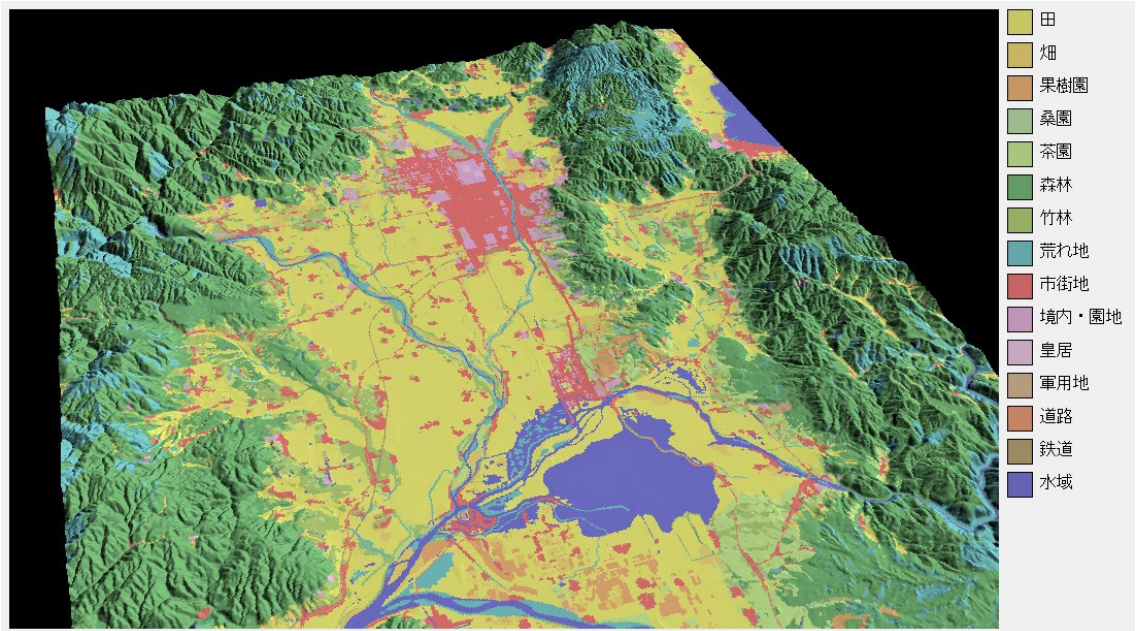
1980年頃、卒論や修論でコンピュータのプログラミングに取り組んでいたが、その魅力にも惹きつけられていた。コンピュータを、所詮道具に過ぎないという冷めた見方をする人もいたが、私には夢を運んでいるように思われた。コンピュータ・グラフィックが一般的でなく、「大型計算機」と呼ばれたコンピュータの出力がタイプライターの印字に過ぎなかった時も、コンピュータで地図を描くことを夢見ていた。

パソコンの処理能力もグラフィック性能も徐々に向上し、私が作成を続けてきた「mapRaster2」にも鳥瞰図の上に衛星画像やその他の属性を色や陰影で表示できるように機能を向上させた。京都大学教養部以来、人文地理の科目には地図関係の実習があり、教室には実習で作成された地形模型も現存している。地形図の等高線判読に基づく地形の分析・解釈などの実習を、私がコンピュータを使った地形解析などを行う「地理学基礎ゼミナール」で継承・発展できたと思うと感慨深いものがある。地形を表す数値標高モデル(DEM)も、始めの頃は地形図の等高線を頼りに自分で作成するしかなかったが、のちに国土地理院やJAXAなどから出されるようになり、解像度や正確さも向上した。「こんな画を描きたい」を実現することができたと思う。カラー印刷のページを用意していただいたので、京都盆地の鳥瞰図をご覧いただきたい。

京都大学に着任して22年、奈良大学に助手として着任してからは40年間の教員生活であった。努力や苦勞もしたが、世界各地を旅行して見聞を広げ、夢をかなえることができたと思う。私は余裕がなく論文は載せられなかったが、本誌には金坂先生はじめ多くの方に寄稿していただいた。奈良大学・奈良女子大学・京都大学の先生方、学生諸君、そして関係者の皆様に改めて感謝の気持ちを申し上げます。



平安京プランを描いた Landsat 画像（2001 年 10 月 15 日撮影）をドレープした鳥瞰図



明治期仮製地形図に基づき土地利用区分した鳥瞰図（土地利用データは大学院生が作成）
地形データは、いずれも基盤地図情報の数値標高モデル（10m メッシュ）による